

## 【参考】

### 「あいちトリエンナーレ 2019」キュレーター（パフォーミングアーツ）

そうまちあき  
**相馬千秋**

1975年岩手県生まれ。東京都在住。NPO法人芸術公社代表理事／アートプロデューサー。早稲田大学第一文学部卒業。リュミエール・リヨン第二大学文化人類学・社会学大学院 DESS 課程修了。

横浜の舞台芸術創造拠点「急な坂スタジオ」初代ディレクター（2006-2010年）、国際舞台芸術祭「フェスティバル/トーキョー」初代プログラム・ディレクター（F/T09春-F/T13）、文化庁文化審議会文化政策部会委員（2012-2015年）などを経て、2014年NPO法人芸術公社を設立、代表理事に就任。2015年フランス共和国芸術文化勲章シュヴァリエ受章。2016年より立教大学現代心理学部映像身体学科特任准教授。2017年より「シアターコモンズ」実行委員長兼ディレクターを務めるなど、演劇、美術、社会関与型アートなどを横断するプロジェクトのプロデュースやキュレーションを国内外で多数手掛けている。



## 「あいちトリエンナーレ 2019」パフォーミングアーツ参加アーティスト

### いちほらきとこ 市原佐都子 (Q)

1988年大阪府生まれ。東京都拠点。2011年より劇団Qを主宰。人間の行動や身体にまつわる生理、その違和感を独自の言語センスと身体感覚で捉えた劇作、演出を行う。女性の視点から、性や、異種間の交尾・交配などがフラットに描かれる戯曲では、観客の身体を触覚的に刺激する言葉が暴走し、舞台上の俳優たちは時に戯画的に、時に露悪的に台詞を全身から発散させる。そこでは、男性中心的、人間中心的に語られてきた性や生殖行為が無効化し、社会のマジョリティを覆っている倫理観や道徳観念にもラジカルな疑いがかけられる。

今回世界初演を迎える新作は、エウリピデスによるギリシャ悲劇『バックスの信女』のテーマや構造を自由に咀嚼した、現代の性や生殖、狂乱をめぐるファンタジーとなる。



『地底妖精』 2017、SCOOOL、東京

Photo: Mizuki Sato

Courtesy of Q

### こいずみめいろ 小泉明郎

1976年群馬県生まれ。神奈川県拠点。国家・共同体と個人の関係、人間の身体と感情の関係について、現実と虚構を織り交ぜた実験的映像やパフォーマンスで探求している。人は、国家や守るべきもののために命を投げ出すことができるのか／他者を殺すことが赦されるのか。歴史や日常の裂け目から立ち現れる究極的な問いをめぐって、かつての特攻兵や加害軍人、イラク戦争従軍兵などへの聞き取りを通じて、暴力や自己犠牲の感情が生まれるメカニズムを考察。当事者たちの感情を追体験させる演劇的な映像は、観客を現実と夢、過去と未来、絶望と救済、憎悪と愛情、加害者と被害者の両極に引き裂き、誰もが傍観者たり得ない社会を批評的に映し出す。

今回はあいちトリエンナーレからの委嘱を受け、アイスキュロスによるギリシャ悲劇『縛られたプロメテウス』を発想の出发点に、初の本格的演劇作品に挑戦する。



《夢の儀礼—帝国は今日も歌う—》 2016、個展「帝国は今日も歌う」VACANT、東京

Photo: Shizune Shiigi

Courtesy of the artist, Annet Gelink Gallery (Amsterdam) & MUJIN-TO Production

**高山明 (Port B)**

1969年埼玉県生まれ。東京都拠点。2002年に創作ユニットPort B（ポルト・ビー）を結成。国内外の諸都市において、ツアーパフォーマンス、映像インスタレーション、社会実験的プロジェクト、言論イベント、観光ツアーなど、多岐にわたる作品やプロジェクトを展開している。いずれの活動においても「演劇とは何か」という問いが根底にあり、演劇の可能性を拡張し、社会に接続する方法を追求。観客論を軸に、観客自身が創造的に現実の都市や社会のなかで不可視なものとの出会い、思考する装置としての演劇を提案。2013年にはPort都市リサーチセンターを設立し、演劇的発想を観光や都市プランニング、社会实践やメディア開発などにも応用する取り組みを行っている。

今回は「情の時代」への応答として、アリストテレスの『弁論術』をベースとした都市プロジェクトを展開。会期中2ヶ月半にわたり、レクチャー、ワークショップ、リハーサル等が開催され、名古屋の街が「演説／パフォーマンスの空間」へと変容する。



『ワーグナー・プロジェクト - 「ニュルンベルクのマイスタージンガー」 -』 2017、KAAT 神奈川芸術劇場、神奈川

Photo: Naoya Hatakeyama

**モニラ・アルカディリ**

1983年ダカール（セネガル）生まれ。ベルリン（ドイツ）拠点。16歳でクウェートから日本に留学し、東京藝術大学先端芸術表現科で博士号を取得。生まれ育った中東世界への鋭いまなざしと、幼い頃から心酔してきた日本のアニメ文化を混交させ、映像、彫刻、インスタレーションなど多彩な表現を行う。国家創設以後の歴史の空白＝ヴォイド、石油に翻弄される中東社会への批評と日本的想像力の交差点から立ち上がる作品は、聖と俗、男と女、死者と生者、善と悪など宗教や社会のなかで二分化された事象を攪拌し、独特な悲哀とユーモアによって越境する。2017年には自らが男装しアニメのキャラクターとして登場するパフォーマンス『Feeling Dubbing（吹き替え感）』を発表。演劇作家としての活動も本格化させている。

今回新たに創作される演劇作品のタイトルは『髭の幻』。かつて日本の霊媒師に透視された40人の背後霊-アラブの髭男達-をメタファーに、中東アラブ史の空白へのアクセスを試みる。



『Feeling Dubbing（吹き替え感）』 2017、クンステン・フェスティバル・デザール、ブリュッセル（ベルギー）

Photo: Catherine Antoine

Courtesy of the artist